

# 論文審査の結果の要旨

平成 30 年 11 月 5 日

課程博士 ○論文博士	臨床教育学	(ふ り が な) 学位請求者氏名	ねもと じゅんこ 根本 順子
論 文 題 目	母親が重症心身障害児と共に生きる経験の軌跡を辿る		
審 査 員 (3名以上)			
主 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	
上田 孝俊 印	安東 由則 印	押谷 由夫 印	
論 文 審 査 要 旨			
<p>1. 研究の目的と方法</p> <p>本論文は、重症心身障害児（以下「重症児」と表記）を抱える母親の、出産からその後の育児・療育過程における多様な経験が織りなす生活世界を、聴きとりを通して筆者が再構成し、母親の苦悩や葛藤が生成される過程や課題を明らかにし、そうした母親の内的世界を理解するための援助職者像をとらえようとしたものである。</p> <p>重症児を抱える家族に対する支援研究においては、医療・看護領域では、家族の医療的行為や育児の指導と相談、レスパイトケア、セルフヘルプグループとしての「親の会」の意義など多面的に取り上げられ、それぞれの視点から支援体制の構築が模索されてきた。一方、社会学の分野からは、障害や障害児・者、彼らを抱える家族への差別観をも含む社会構造、さらには親自身の差別意識の両義性に関わる研究という広がりがみられ、さらには多面的な母親自身の生活感情に即した理解の必要性にも言及されてきた（藤原里佐 2006）。本研究は、医療・看護領域の支援と多面的な母親の生活感情の理解という2側面を統合的にとらえる臨床教育学のアプローチに位置づけられ、そのために母親の個別の内的世界を言語化し、その「語り」の再構成から課題をとらえるナラティブ的探究の方法を研究方法として採った。</p> <p>2. 論文の構成と内容</p> <p>序章では、1) 重症児の治療・療育に関わる実践の歴史的検討、2) 重症児と家族の生活現実、3) 重症児の母親の心理的課題について、先行研究を踏まえながら論述し、4) 家族の輻輳する課題への接近の今日的必要性和本研究の目的や研究方法について述べた。</p> <p>第1章では、重症児への医療とその保護者への相談活動に取り組んだ小林堤樹の実践を取り上げ、相談活動に帰着するまでの小林自身の体験、重症児への関わりから、小林の援助思想の形成、会報とノートによる相談活動の内容について検討し、それらの関連と相談活動の位置づけや意味について考察した。「懇切丁寧」「不治永患」などの言葉はその字義の背景にある小林の実践から解釈されるべきこと、そうした思想を親にも示し、医師としての限界をも自ら認識し、かつ親の苦悩・葛藤への理解と支援をおくった、小林の言葉では「連帯」と呼ばれる姿勢があったことを明らかにした。</p> <p>第2章では、第1子と第2子が重度の脳障害をもって生まれた母親からの聴きとりとその解釈を論述した。家庭での重症児の育児とその責任が母親に掛かり、そのことで家族からの孤立感をもったり、医療的な行為に習熟することで援助職者からは母子関係が良好と理解され輻輳する葛藤が語れないままにあったことが明らかにされている。またこの母親の語りには第1子での育児の経験を第2子へ意味づけようとする探究もみられ、母親の重症児の育児に対する時間的変容が意識されていることにも言及した。</p> <p>第3章では、妊娠高血圧症候群のため低体重で出産した双子（一人は脳性麻痺の重症児、もう一人は未熟網膜症で片眼の視力を失ったが現在は順調に成長）の母親からの聴きとりとその解釈を論述した。重症児の「生」に寄り添い続けなければならない母親が、その葛藤を「永遠のテーマ」として意識するとともに、子どもが示す反応と変化を頼りにし、それを見逃さずにいられるのは自分自身だけであるという「唯一の存在である」ことの自覚も確認された。そして、母親の</p>			

生活を全体的に理解し支える存在として、「重要な他者」の関わりが指摘された。

第4章では、前章までの考察をもとに、重症児を抱える母親の語りを受けとめる存在についての論考をおこった。聴きとりを通じて得られた課題は、母親の孤立感、その背景にある母性意識や文化的土壌からの価値観の強要、援助職者と母親の感覚のズレ、母親の揺らぎとその受けとめ手のありようなど、現代の医療・療育体制と育児や障害受容の現実を投射したものであった。

小林提樹は「連帯」という言葉に「重症児と家族と同じ痛みを感じ、同じ目標に向かう姿勢」という意味を含めた。それは小林の実践から析出されたものであり、「医師でありながら、治療ではなく支え」を重視する概念であった。小林の「連帯」概念から現代的課題を捉える基盤となる医療思想、家族援助思想を検討し、筆者自身が小児・産婦人科看護師、小児看護学の教員としての省察を加え、従来の療育的視点を超えるアプローチの可能性を探った点も、重症児の母親の内面世界の語りを引き出し得た研究基盤であったととらえた。これらの研究成果を援助職が重症児の母親理解の質を深める提言とし、本論を締めくくっている。

### 3. 審査の結果

#### 1) 本論文の評価

本論文は重症児の母親の心理的な動きを丹念に追ったものである。医療人類学やナラティブ研究の成果に依拠しつつ、1) 重症児の援助職がもつ期待とそれに応えようとする母親の苦悩、医療技術の進歩と家族内での母親への育児の役割強化とそれに伴う孤立化、治療の可能性と障害の継続性との葛藤など、輻輳する母親の内的世界の葛藤を「語り」として引き出し、解釈したこと、2) 重症児の母親の苦悩を聴きとる「姿勢」に、聴きとる側の人生の「経験の軌跡」が関わること。そして聴きとる側が自身の「姿勢」に自覚的であること、の2点が本論文の成果としてあげられる。援助職の専門性を問い直すことは臨床教育学の課題である。今日的な、知識や技術レベルでの専門性や役割の強化が中心となるなら、病者やその家族の内的世界の理解が浅薄になり統合性が弱まるのではないかという、援助職者が内包する矛盾を問う論文として位置づけられる。

文章も推敲を重ね、博士学位請求論文として「合格」の範囲にあると判断した。

#### 2) 本論文の課題

援助職の専門性について、システムとしての専門性と本論文が指摘した「人間の内的世界を理解する」専門性についての相互性や相関にさらに論及していくことが今後の研究課題であると考えられた。

#### 3) 審査過程

2018年7月7日の第1次審査（臨床教育学研究科（博士後期課程）委員会）において書類審査をおこない、博士後期課程満期退学生の論文博士学位請求論文提出要件を充足していることが確認された。7月18日の第2次審査（主査・副査による学位請求者に対する質疑と審査）においては、修正を条件として合格と判定した。この結果を、8月1日の第3次審査（論文審査委員会）によって追認し、修正事項の追加確認をおこなった。10月13日に論文審査委員会判定会議（論文審査委員による学位請求者に対する質疑と審査）をおこない、合格と判定した。10月20日に公聴会（最終試験）を開催し、10月24日に臨床教育学研究科（博士後期課程）委員会にて合否判定に関する討論をおこない、その後の投票により合格と判定した。